

外国語学習における動機づけを高める 教育介入に関する実証的研究

学位論文内容の要旨

本研究の目的は、自己決定理論に依拠して、外国語学習者の動機づけを高める教育介入を行い、その効果を検証することである。自己決定理論とは内発的動機づけに関する研究を中心に据えた、心理学における動機づけ理論である。自己決定性の程度により動機づけを細分化し、多様な動機づけ概念の検討を可能としている。また、動機づけを高める要因として、3種類の心理的欲求（自律性、有能性、関係性；以下、3欲求）の充足を想定している。本研究では、外国語学習の観点から3欲求を捉え直し、これらの欲求が外国語学習者を動機づける要因として果たす役割を検討する。

従来の外国語学習における動機づけ研究は動機づけの分類や学習成果との関連を分析・考察した研究が大勢を占め、外国語学習者の「動機づけを高める方略」に関しては、ほとんど研究が行われていない。学習者の動機づけを高めるメカニズムが明らかになれば、教室における効果的な学習指導に貢献することができる。また、自己決定理論という理論的枠組から想定される仮説を実際の教室で検証することにより、研究から示唆された知見の学習場面における再現性を調べることが可能となる。したがって、本研究は、学習指導に対する具体的提言を行なう教育的意義、ならびに、より精緻な動機づけ理論構築の基礎となる学術的意義の双方を併せもつ研究である。

本研究は、2種類の調査から成る。本調査1では、教室における英語学習場面において、3欲求が動機づけにどのような影響を与えているのかについて、全体傾向と個人差の観点から検証した。本調査2では、3欲求の充足を意図した教育介入を一定期間にわたって行った。具体的な介入としては、ライティング授業における自由英作文活動を用いた。学習活動に幅広い選択と責任を提供し（自律性を育む）、課題の完成へ向けた建設的で示唆に富んだフィードバックを与え（有能性を育む）、共同作業による学習場面を作り出す（関係性を育む）ことにより、3欲求を同時に満たす学習活動を実施し、その効果を全体傾向と個人差の観点から検証した。

本研究では、質問紙法により得られたデータを、因子分析、共分散構造分析、クラスター分析などの統計的手法を用いて分析した。また、自由記述調査を併用し、総合的な観点から考察を加えた。質問紙には、予備調査を通じて開発した質問紙尺度（英語学習における心理的欲求尺度、英語学習における動機づけ尺度）を用いた。調査対象者は、必修科目として英語の授業を受講する大学1年生であり、本調査1は2004年6月に180名を対象として、本調査2は2004年9月から12月にかけて100名を対象として実施した。本調査1では、共分散構造分析により、3欲求と動機づけの全体的

な関連を把握した。また、クラスター分析により、動機づけの特徴が類似する学習者群を分類し、各群の3欲求の充足度について検討した。本調査2では、対応のある t 検定により、3欲求と動機づけの介入前後における変化を比較した。また、クラスター分析を併用し、個々の学習者群に対する指導効果を検討した。

次に、本調査1と2の研究結果と考察について順に述べる。本調査1では、各尺度の内的整合性を検討するために、下位尺度の α 係数を算出した。その結果、心理的欲求尺度($\alpha = .84 \sim .89$)、動機づけ尺度($\alpha = .73 \sim .89$)とともに、心理尺度として信頼できることを確認した。動機づけの各タイプ間には、シンプレックス構造が得られた(内発的動機づけと同一視的調整、取り入りの調整、外的調整、無動機の相関係数は、 $r = .47$ 、 $-.09$ 、 $-.40$ 、 $-.50$)。このことから、英語学習場面においても、自己決定理論の動機づけモデルは適応可能であると判断した。3欲求と動機づけの全体的関連についての分析からは、有能性と関係性の認知が動機づけの各タイプに強い影響を与えていたことが示された。自律性については、密接な関連を持つ他の2欲求の影響を取り除いた場合、動機づけへの影響が確認された。個人差を加味した分析からは、動機づけの高い群は3欲求の平均が高く、他方、動機づけの低い学習者群は3欲求の平均がいずれも低かった。これらの結果から、自己決定理論における3欲求は、英語学習者を動機づける要因として有用な働きを持つことが明らかとなった。

本調査2では、3欲求の充足を意図した教育介入を行い、その前後において3欲求と動機づけの変化を比較した。全体傾向の分析からは、3欲求(自律性: $t = -7.07$ 、 $p < .001$ 、有能性: $t = -2.65$ 、 $p < .01$ 、関係性: $t = -9.88$ 、 $p < .001$)、動機づけの各タイプ(内発的動機づけ: $t = -5.10$ 、 $p < .001$ 、同一視的調整: $t = -11.92$ 、 $p < .001$ 、取り入りの調整: $t = -3.12$ 、 $p < .01$ 、外的調整: $t = 3.77$ 、 $p < .001$ 、無動機: $t = 5.18$ 、 $p < .001$)とともに、大きな変動を確認した。個人差を加味した分析からは、3欲求を満たす活動を通じて、介入前の動機づけの高低に関らずどの群の学習者も、より自己決定性の程度が高い動機づけを発達させたことを確認した。これらの結果から、英語学習者の「動機づけを高める方略」として、3欲求を満たす学習指導が効果を持つと結論した。

さらに、3欲求と動機づけの変動の相関を検討し、動機づけの発達を促す3欲求の働きは、学習者の動機づけの特徴によって異なることを確認した。動機づけの低い群は、有能性($r = .63$)と関係性($r = .32$)が内発的動機づけの上昇と関連が強い一方、介入前からすでに動機づけの高い群は、自律性($r = .39$)と内発的動機づけの間には正の相関、関係性($r = -.40$)との間には負の相関を持っていた。また、自由記述の分析から、同様の傾向を示す結果が得られた。これらの分析結果から、動機づけが比較的低い段階にある学習者には、有能感や他者との関係性を満たす働きかけが求められるのに対して、すでに高い動機づけを発達させている学習者には、自らの学習に対する責任や選択といった自律性の欲求を満たす働きかけが必要であると判断した。

以上のように、本研究では、自己決定理論を基に、英語学習者の動機づけを高める3欲求の役割を検証した。その結果、3欲求は英語学習者の動機づけを喚起する上で重要な働きを果たす一方、学習者の動機づけの特徴に応じて、その働きは異なる可能性があることが示された。動機づけの発達を支援するためには、学習者の動機づけ段階に応じた働きかけが必要になる。従来から、個人差に応じた学習支援は強く求められてきたが、本研究はそのような指導を行う上での具体的な方法を示唆している。また、これまでの動機づけ研究はその大半が記述的な調査であったが、一定期間にわたって教育介入

を行い、その効果を検証した本研究は、学習者の動機づけが発達・変化していく過程とメカニズムを
解明する上で重要かつ有意義な試みであり、より精緻な動機づけ理論の構築に貢献し得る研究である。

学位論文審査の要旨

主 査 助 教 授 河 合 靖

副 査 教 授 西 堀 ゆ り

副 査 助 教 授 小 林 由 子

学 位 論 文 題 名

外国語学習における動機づけを高める 教育介入に関する実証的研究

本論文では、自己決定理論に基づいて、動機づけを無動機、外発的動機づけ、内発的動機づけの3種に分類し、また、行動を調整する主因として、非調整、外的調整、取り入れ調整、同一視的調整、内発的調整をあげ、最も非自己決定的な状態から最も自己決定的な状態へと順に移行する連続体として捉えている。また、動機づけに関わる中心的な心理的欲求を、自律性、有能性、関係性への欲求としている。この心理的欲求が動機づけと関連するか否か、また、この心理的欲求を満たす教育介入により動機づけの高揚がもたらされるか否かが、本論文の中心課題である。本調査1と本調査2の研究により、これらの心理的欲求は動機づけと密接な関係を持つこと、この欲求を満たす教育介入により動機づけが高められること、また、学習者の動機づけ傾向の違いにより各欲求の果たす役割が異なることが検証されたとするのが廣森氏の本論文における主張である。論文の内容に即して、研究の具体的評価を論述する。

第1に、研究テーマの的確性、つまり、本論文が固有の研究領域を有し、テーマが学術研究として意義を持つかを評価した。本論文の研究背景及び先行研究の概観の章において、第2言語習得研究、応用言語学研究に占める動機づけ研究の位置づけと意義が、豊富な資料を基に説明され、外国語学習者の動機づけを実証的に調べることの学術的・教育的意義が明瞭に論述されている。本論文の学術的貢献は、西洋の研究・教育文脈で発達してきた自己決定理論がアジア文化圏にも応用可能であることを示した点、また、先行研究では自律性と有能性が中心的に論じられてきたが、関係性への欲求も外国語学習者の動機づけに重要な役割があることを示した点である。

第2に、研究方法の的確性と研究分野への貢献を評価した。研究方法の章において、本研究で用いたデータ分析を選択した理由が詳述されている。本論文では、心理的欲求と動機づけの関連を検証的因子分析とクラスター間の分散分析により考察している。また、教育介入による動機づけへの影響については、事前・事後の変化量の t 検定を用いている。方法の論述は明瞭で、本研究の目的に合致していると判断した。研究方法における本研究の貢献は、以下の2点である。第1点は、従来の動機づけ研究では全体的傾

向を主に論じてきており、個人差の観点から考察することは稀であった。この問題点を克服するために、クラスター分析の手法を導入して統計的な分析を可能にした。この手法は、教育場面でデータ収集を行なう際に、実験群・統制群を設けることによる実験的手法の倫理的問題をも解決することになり、今後、他の研究テーマでも応用が予想される画期的な提言となっている。第2点は、外国語学習場面での動機づけと心理的欲求を測定する2つの尺度の開発である。自己決定理論にもとづく外国語学習の動機づけ研究においては、外国語教育場面に対応した尺度の開発が不可欠であったが、綿密な統計的検証を経て信頼性・妥当性の高い尺度を完成し公刊したことは、この分野の研究にとって多大な貢献である。

第3に、結果の解釈に対する妥当性を評価した。心理的欲求と動機づけの検証的因子分析では、モデルの適合度は高かったものの、自律性への欲求と動機づけとの有意な関連が少なかった。また、教育介入前後の心理的欲求の変動と内発的動機づけの変動との相関では、有能性が有意ではなかった。しかし、総合的に見て心理的欲求と動機づけの関連は強く、教育介入による内発的動機づけの高揚は否定しがたいことから、3種の心理的欲求と動機づけは密接な関係を持ち、この欲求を満たす教育介入により動機づけが高められるとする廣森氏の主張を受け入れるのに十分な証拠が提示されたと判断する。また、動機づけの低い学習者には関係性、高い学習者には自律性や有能性の欲求を充足する必要があるとする氏の主張に対しては、本研究で得られたデータの範囲内で妥当な結論であるが、教育介入の内容により結果が異なる可能性があるとして審査委員から指摘された。しかし、この点は、本論文の「結果の解釈上の制約及び今後の課題」において、既に今後の課題として位置づけられており、本研究で用いられたライティングのみならず、他の言語スキルを含めた教育介入での検証を重ねることによって、今後明らかになっていくものであり、本論文はその道筋を明らかにしたと判断する。

以上により、研究テーマ、研究方法、結果の解釈において博士論文として求められる水準を十分に満たしていると判断する。また、動機づけの高い学習者と低い学習者で教育介入に際して働きかける心理的欲求を変える必要があることを実証的見地から示したことは、外国語教育への多大な貢献とみなす。

よって著者は、北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。